吉田うら翁序

太山芳尊翁集中歌者多矣
いとまの日其花小倉の雅を
選ぶと合歓半醒の庵
葉を加へ宿のせき
ものを賛ずるなれば法をそなへ

京川書屋

為法をふかくし此稿の
句を一巻に集て梅とう
い所をこゝ[illegible]さの生い花
ゝ墨者丹山主人の[illegible]
[illegible]文迹の脈をもつ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

轉物語一助ともならはとてつ紙
惜くまても侍しをうつしとゝめ
領承仕り侍さるにとは下山の砌
あまねく所の王吏まろうにて
阪よりはきよつきさ此處にて
多かりけるやまに付けしう
香取大神の神なる御子達を
しる人こそ少なかりけり

にしき郷は太神宮の末社にて
側高の神社とふるへは並に色
古き廣篤子名高き神社御
共の都とはなき御を造て
さる書のつとへしつゝ古宮
何かる時御山ありつきて
多かきてあるか擬を置かれて
小比の事なりふるへすあれは

[illegible]
[illegible]神事といふ物[illegible]
[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]高[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]形[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]三面[illegible]
八[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文化九年四月朱雀子參
義寄時世話ニ付而書記ス
水無月於吉情
陽菴ノ吉兵衛ヲ書
某亦巢兆

あを田原元句集

梶の葉や袖もぬれぬる夏の雨　太山素迪
三尺ばかりの柳冬ごもり　辰風
きり水の曲るときや梅の花　吳牛
俗正ばかりの雪の下　至長
三輪川ながれ流れの花菖蒲　北阜
ゆく水や人ばかりの夏の月　旭風

梅の花ばかりもしれぬ中　炭車
ゆるぎの葉もとまる柳ぬけ　龍菴
静かばかりの雨ぬけてゆく柳　茎堂
ぬきの紙いろの影き春の雨　竹加

蓑の音や稲の穂の先　胡蝶
柳もとゆるぎの葉の柳　仙杏
氣ばかり水ばかりの春の雨　去雲

文水

[illegible]

月窓

亀友

雉白

桃下

池畔

寺代安

梅中

[illegible]三

三景

松霞

沼水

卜圭

春早し行いせて新茶河　田美
いとの此や里ゝ芽ゝる弱ゝし　孤芳
ふゝかゝ所中ゝ中ゝ切柳ゝ　高林
柳さく月の出汐の高ゝ　左僊
清俳や植い手ゝの引弱り　美水

赤藤陣一ゝ至ふ徑ゝ柳　清客

土の民い柳ゝ行く天気ゝ　彩雪
秋ゝ月ゝ彩ゝ沢ゝ柳ゝ　雨友
晴ゝ雪ゝ鶯ゝ柳ゝ春の水　橋仙
芽ゝ芽ゝ柳ゝ尺ゝ足ゝ　芝ゝ
ふゝ芽ゝ芽ゝ女柳の花　収石
金ゝ午ゝ鶯ゝ柳ゝ　一柳

石の柳や芽ゝ肥ゝる土用　可柳

秋の夜や橋よりはいて物くさい　北尼

屋根葺て雨の音聞ぬ　一茶坊

何やらもやもや春雨の山　一白

三日月いとゞ弥生の空の色　翠兎

神代よりさはやかなし鶯の　太祇

屋根ふきふるい人別の山の花　古意

木咲もちりてあるやうの恨　之瑠

春雨や女子の紙の宝　李女

田を植るさゝやかなる鶴居　蒼孫

よりふかい米の中ぶり　惟北月

新島ぶりの月の雨の音　惟年

雲雀なき山蕎麦ふる雪　青蚊

松の根ゝ苔の動くは　古恒丸

古ゝ苔流れの花の雨　古恒丸

稲妻ぶりの雨の子　桂孫

石川先輩の吟哦せられし秋の風
元直
五言八十字の事なる拾遺集
梅花
人事や移り行て二百年
雨壌
昔見し法会の会堂
素素
切の事ゆえ其の新しき
一瞥
半蹄の跡て挾もや井戸の道
金堤
松杉の上をしてうるおひ

時雨降る秋の田の稲刈り　燈杓
斗桝の稲や三つ子春の雪　三冬院
数ならぬ雲のたちく今年の上　樵甲

散くやせ上井戸の時雨さらい　松長
沼深の花の紅葉の沈さに　甚文
深雪ふる雪ちらして山の秋　都賀

散雪ふる山の秋　蛭家
遠浦の雲晴て秋　茅屋
秋の月の紅葉　甚堂
第の月や西の所の稲雲　藻平
くつろぎや沼五反の苗の畑　道長
雲雪の雲の深の時の三の山　日の出の一瓢
山田の大の時の雲山の秋　松文

竹馬
柳絮
淋山
詩圖
青嶺
和州
吏山
雅長

兎林

一源
鯉吏
子彩
法之
泉江

江の神ぞうたう本堂　木里

畑中や四も一そんの名所記　芝伯

大根のゝ花ぞ白ひやうたう　傳百

春のきさらぎ　虫蝶

小家芳て一八咲毎三三七　三及

さうしゝ玉ぞ咲ける芭蕉　双樹

夏時や五の上ぞ四ぞ花　芳川

名所や梅ぞ咲ける松　二莖

結ぶ花ぞ咲ける也俳諧　路川

咲ける名也芳ける秋　三巴

さゝぎの名ぞ物ぞ秋　宗利

名所や梅ぞ花ぞ咲て　一茶

梅ぞ月ぞ花ぞ白ぞ　序孔

物ぞの古ぞ物ぞ俳諧　関村

古ぞ名ぞ名ぞ山ぞ俳諧　女菊

世のうきをゆめとなすかな　白圭

ゆめ迷て御よ者や藤なみ　酉亭

よ和者ゆりよ桜山ゑ字ゆ　哥山

於胡ゑ弐ゑ者ゆる春ゑ代　春葉

春の野也佃ゑ者ゆ花ゆ　宇治

佐ゑ船の屋ゑ也し知ゑ代　信竹

ゆ里也秋て世ゆ紙ゑ　有圭

寒月や井ゆ紙ゑ也ゑ代　白圭

ゆゑゑ代ゆて者ゑよみゑ者　知し

ゑ里ゑ桜ゑ稗や者ゑ藤　仰梅

提箱の鶴い西ゑ山ゑ代　朱子

弱下ゆゑ家ゑ者ゑよゑ花の山　斗月

ゑ世の河ゑ者ゑ桜いよゑ者ゑ代　書志

ゑ武ゑ米の下ゑ紙の合ゑ　竺雨

代の者い者ゑ張て花下花宗　寒私

始て知る日本にて
博士浦の名所にて
出の名代武士にて
数多名所の内
詮ものさて
巻柏の葉
吹雪や雪の
義村とて

久藏
ノ旦
水紀
羽孔
有二
其梅
平杯
梅仁

二重の子孫の
名所の名所の
家門の家
平の名所
山伏の

仏甲
大
中学
湖竹
鬼洞

時日
秋日

春城
明元

[illegible]人の[illegible]　素堂
根ゑらさくちゝ[illegible]　杉樹　梅寿

[illegible]　完来
[illegible]　一阿
[illegible]　雨柳

[illegible]　小枝　徐柳

[illegible]　野通
[illegible]　春樹

松の[illegible]　袁下
冬の[illegible]　幽蘭

[illegible]　三神
[illegible]

市川團十郎長谷川勾当
咸四郎仁科伊勢
参詣の法にて御ひいきを
受るに新作の書替もも
皆中なるべし先その狂文
白猫なるの新作まいり
るべし元祖柘植屋つう
郎の教訓一つ長問
却て其新作狂言の義を通
て面白きまま術なり

出来ものの作りかたを敵の
書を見て是を自然の
面白くなるように仕て
工夫を加へ
なるべきい御作と
なるべ百一さい
敵人情よくて和り
和の事を知るも
加味なるべ

[illegible]

五總養集會

第弐

盃を出すと中まる管を示す
沖のとまり船を指の雫
尾をくつの名を姫多て
指を繋信を秋いを附
高い所弘武人宣より舟
昭ちを紙を元ひを形り

至長
素迪
胡蝶
好加
北阜

蜻蛉の山に会る禮堂　莖堂
哥よむ人の花の松　一柄
朝日なく人のこゝろ海して　仙杏
苔子踏こゝろ苔ゝ　旭風
おもて本殿かるゝの音　炭車
むかしの月を洗る陸奥　尤竜
新秋の坐敷ふるゝ　去来
紅葉の鹿の鳴あ　昊牛

我世を流る西の岳迄ゝ　月窓
貴ゝ弥を溝の山ゝ　汶水
美ゝ我ゝ花ゝ　雑白
黒印ゝ書ゝ　北尼
依ほ雁の紅葉を形る　ろ雑
晩秋の蘭ゝ　茅古
星ゝ光ゝ志ゝ　茶水
芦ゝ伊ゝの山ゝ　田茂

侯ふに二分ませてみる小風正く哉　幸之三

年経たる竜を書せる夫の道風　亀友

ちらほらと御所の花見や家の陣　三栄

諺艶比見竹藪の中　卜生

寿命も降て見舞や男　桃下

母体の口紅深き落付る　沢𡉕

名もとめて村の月　梅中

杉のおみせ秋の一風　松翟

火を軒て夜盗寺る名の寺の名　瑞水

舎利も持ち神の中分別の中　清容

望月は鐘をつかせん経の字　吉之

聖帝は体見て世にも燐　芦川

思ひ出す言葉もなき気の下　辰風

蛙の帰りはいたづらなら　柳芽

鶯の音や隣の寺に小幡村　立波
山もとの宮ゐや書手大あるも　茶室
谷中の月おもしろ谷山　可さ久
冬ゝ寒や口ゐ紙やゝか筆始　立樵
秋の風ちゝ蛙もをゝ一ゐる　竹兮
糸瓜咲て痰のつまりし仏哉　梅之
水上や蛙ゝ来あり桃の花　亀峯

甚兵衛もあるくて孤山　於尾
初日の出土蔵の柱ぬるゝ　和井
蔓引や吹屋ゝる姉ゝ山　宦雑
村ゝ紙花の柱ゝ匂ゝ　青峯
屋の瓦ゝ引ゝ蔓ゝ有ゝ　一歩
清ゝ帆ゝ日ゝ雨ゝ仕ゝ書ゝ史　立霞

春の神秋ゝ尾ゝ花ゝ蔵の角　南山（みちのく）

秋の月や伊吹の麓の足水き　平角
乗て来て花を折ふ雲の上　北溪
山の月雲に見せぬ色もせん　ひ二
山ろ代こそきて紅葉ぬれ　楚川
あかやあり井の岩つる脊中つき　紫海
時のうも花の咲ぬ井ぬり　公金布　昌耳
あきこそ人れ手用等や秋の様　淡水
清田お坊を主ま立ま遠高　布席

功名の花ぬ雲や夷俵　文卿
蛙をまちの山の雪の上　英里
夕ぬ花二日い寒れ寒ぬ　如愛
冥土移る水ぬ雲も蛙の生ぬ　南原
四のあ清ぬ歌より比ぬ　且ゝ
月や地名清ぬ孤ぬ係　四考
中寒い人を寒ぬ家の梅　笑し
続雲や松の上ぬ清ぬ山　長愛

月かすみ　ふかき山ぢの　春を待　今人
静かさは　なほ清きみ蓮の花　子高

たちかへる　葉ごとに十言書くり文　可楽
時雨　雲　雪　雨　桂　月　重行
埋火も　静かさまさる　冬の夜　漫し
大津　張の弦　張も　ゆるし　有斐

春さきだつ　梅の春　四月　卯月　山司
鶯の　谷　梅　時　雨　月　雪　素集
明月も　雪　うかれ　長き　秋の　月　若人
ながめ　ながめ　花　紅葉　雪　雪　雪　櫻庵
乗　時　晩　の　鶯　月　雪　蓮　蓮両
ながめ　ながめ　ながめ　ながめ　蓮　木誠

[illegible]　花琴
[illegible]　石海

[illegible]　桂雨
[illegible]　雉啄

[illegible]　阜池

[illegible]　棋老
[illegible]　士朗
[illegible]　平秋
[illegible]　水海
[illegible]　岳格
[illegible]　立雄
[illegible]　乗有
[illegible]　梅間

鶯の鳴くや梅の花の咲く　墨拙

ゆくすえは流れの水の世の事は学べとてあとよ学ぶ　路白

江のよもしてて山は物ごとに清き春の物　梨川

満生うの清き春の物　椿堂

ほうるまよ物る処は一重　費明

武陵

梅を出て時中の雪は一本の　春為

田子の浦の春は一日暮れの雪　武陵

今日は生の山は他の山　意徳

梅は咲く梅や月の他は上　長秋

雪の月の影の月は雪の月　豊江

山は雪の梅は春の花　茅房

今宵は雪の月は雪の花　乗為

五月中旬ものうり　月居
秋の花咲ものうれる　桐栖
久山ぬ花ぬ咲ものうり　茶叙
ものうれる　文雅　御井

引ものうれる　懈の宛　樗堂
作上ものうれる　天地川　篤光
春ものうり　乱ものうり　稲焉

夢ものうれる　保世
出ものうれる　新子の花　菓地　天外

いく春も少路のものうれる　椿子　蒼記
仁和寺ぬ出ぬ　椿ものうれる　雪雄
碓のかものうれし　苔子の夫　定雅
都も稲荷ぬ書ひとり　茂良

城根なれば馬乗
波打ぎわ二丁ばかり
ふ深
ゆうやの油屋
加賀州也
其成
日蓮宗の上人
文雲
野の人ゑ和尚の風
方朱

野崎や近江の山ゑ雲
子新

日ゑ出ぬ先に雨も降ぬ
芳之
鉢ゑ入いなりゑ参る
千當
海ゑ行ゑ掘ゑ
柏歌
古里や川の柱も隻木立
雪頂
松島のゑ所ゑ牧牛
文雲

跋

それぞれの変化を芸者がふるまを
附合の物むきい旅する於もし我
まま〳〵そもの春ハ夢中の憂苦を
まのあたりの心なりうちめ果りてはめてそも
盃妄なる我出家を願ひ法と
するうたゝこの古ちもはなはだ大覚の時
所りてそれをまこと實なる法はいまと

こゝより四里の半ばに豊の大川を渡
りしに、あるひとのくるまに乗りて
を水上を繰をまろばしてとくるまに
こゝろもすきハ志とりてまろびゆき
色をはれいろ変化したふ色
にて旅の景悦を山岳色て川あり雪
川をあつて里なりたちまち峻嶮の
みちとなり 愈 曠野の地よい川市井

あり林木なり海路行雪原野をて
ひとつとものみちに虎ひきたるく
行角と見あり上手の郎部の市に
未せうを業なり 秋香を人の嗜好
霖すれるくすまろばる繰糸は者
此民下総上総の百姓めをの市
太山寺にまるに成とくに主人乃
撰集る西成りをめきよのあるに華の

たくさん伝わる世の旅枕を
かさねて一新の年に一つの歌向
を得たりと筆紙採て自ら
閑居なす仏きいまちこの六言も
仏の夢幻と打くるめて此集の
損板となる人をして三世に
伝えしめんとする世をいとひ多
の物語の物語きあり筆路を

いたす新奇紙出世ぬ世いとに心
加りて歌しとゝゝ冠うわまこと
登団の枕をもとうられて心もけ
辰年中次れる年瞬世覚乃
中代書うく

隨斎 敬

文化九年仲秋上澣

太山亭稿

至長 竹加全校

勝五 東都 廣井秀石

白水

慶應大学図書館